

【聖書】

ルカ福音書 17:20 ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。21『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

◇序論

今日、礼拝堂に集められた一人一人、インターネット中継で礼拝を捧げている一人一人、どのような一週間を過ごして、主イエスの足もとへ戻ってきたのでしょうか。「大変なことがあったけれども、神さまに助けられて平安に生きることができた、神さまって素晴らしい」と賛美をもって礼拝へと戻ってきた方もおられるでしょう。また、一方では、罪を犯し、罪を犯され、傷つき傷つけられ、心の痛みを覚えつつ、しかし、それでも尚、主の言葉を求めてイエスさまの十字架のもとへと戻ってきた方もいるかもしれません。さまざまな想いでここに集ってきた私たちに、主イエスはおっしゃいます。「**実に神の国はあなた方の間にある**」。

◇神の国とは

みなさんは「神の国」と聞いて、何を思い浮かべるでしょうか。「**神の国**」、マタイによる福音書では「**天の国**」、天国です。聖書の中では、神の国と天国とは同じですが、私たちが普段使っている「天国」という言葉の意味から考えると、随分と違います。私達が普段使う「天国」とは、死んだ後にいく所で、神さまがいるとても美しい場所、あらゆる意味で満ち足りた場所の事です。また、「この世の天国」と言えば、ひとつの理想的な社会を思い浮かべます。豊かで満ちたり争いのない社会、差別も格差もなくみな大切に思い合う社会を考えます。たとえば楽園にいた頃のアダムとエバの生活が「**神の国**」または「**天国**」の生活だというふうに私たちは考えます。私たち人間が満ち足りて生活するという事はなかなかないことです。何かの欠けがあります。お金がないということもあるでしょうし、病気もある、愛する人がいないという事もあるでしょう。その点、楽園で暮らすアダムとエバは、あらゆる意味で、満足すべき状態にあったようです。ところが、彼らはその楽園を失ってしまいます。彼らが神に背いたからです。そして、彼らが神に背くと、楽園の満ち足りた生活の全部が、一挙に失くなってしまいました。その後、聖書は、

エデンの園について、何も語らなくなっていました。なくなったからです。あらゆるものが十分に整っていて、そこに暮らす者は、全ての点で満ち足りていたのですが、その生活は、この二人が神に従っていた限りのことだったのです。毎日、彼らは神に呼ばれ、神の呼び声に従って、神の前に現れて、み顔を仰ぎ、神に守られていることを確信して、自分達の生活にかえっていく、という生活をしていました。ところが神に背いた時、彼らは、神に呼ばれても、神の前に出て行く勇気がありませんでした。しかも、それを、嘘の口実をつくって、ごまかした…と聖書には書いてあります。楽園が、真実の意味で、楽園であるためには、いろいろなものがそろっていることも、大事であったかも知れません。が、それよりもなによりも、神と信頼しあい一緒に暮らすということが、もっとも大事なことであったのです。それが、なくなった途端に、一切のものが消え失せました、これは、大変に意味深いことです。

神の国とは、こういうふうにも言えます。度々申し上げていることですが、「人は縦軸と横軸で生きる」、縦軸とは神との関係、横軸とは人との関係。人は、この縦軸をまっすぐに打ち立てる事ができません。偉人や英雄を神として崇める事もありますし、人間が考えた哲学や道徳を絶対的な指針として生きようとする、縦軸とする事もあります。しかし、それらは人間がつくったもの、座標で言えば、まっすぐに上にあるものではなく、随分と低い位置、横軸の近くにあることになります。そして、しょっちゅうその位置を変えるのです。ですから、それらと縦の関係を結ぼうとした場合、縦軸は大きく斜めに傾き、しかも、安定せずに揺れ動く事になります。そうすると、横軸じたいも激しく揺れ動きます。全体が倒れてしまう事もあるでしょう。しかし、縦軸、神との関係がまっすぐに安定して据えられた時、横軸は安定します。人は自分自身との関係も含めて周囲としっかりとした関係を持つことができます。ですから、神の国とは、神との関係、縦軸がしっかりと据えられた者達が、この縦軸に支えられて、横軸、周囲との関係に生きる所だとも言えます。

このように見てくると、主イエスが仰る神の国というものは、人間が、「ああいうふうであればいいな」「こういうふうであればいいな」と、自分の欲望の限りを並べ立て飾り立てるような意味での、理想の世界でない事がはっきりしてきます。神の国とは、人間を真実に愛してくださる神が支配される世界、そして、その神の支配に、人間が真実に信頼し従って生き、神と人と共にある世界といえます。神の御心が成就するところ…という事ができると思います。

では、神はどのようにその御心を行われるのでしょうか。地上の人間の国では、法律で秩序が保たれます。法を犯せば裁かれます。神の国も、神の裁きによって成り立つ、つまり、神は裁きを通して御心を行われると考えることは出来ると思います。地上の人間の国の裁きは、人間が行うものですから絶対的に正しい裁きではありません。一方、神の国の裁きは、絶対的に公正なもの。悪いことをした者達は、みな神に罰せられ、いいことをした者達

だけが幸いな生活ができる、だから、そんな神の徹底した裁きによって、神に逆らう者達は滅ぼされ、神に信頼する正しい者達だけが神と共にいる世界、それが神の国だと言うことはできると思います。しかし、この神の裁きとは、キリスト教徒だけが生き残り、それ以外の人々が滅ぼされるなどと言う荒唐無稽なものでない事は明らかです。キリスト教徒であろうと、神の目に悪い事をすれば裁かれるし、異なる信仰や特定の信仰を持たない人であっても、神の目に叶うのであれば、神の国の民として認められるのです。しかし、天の御神の裁きは地上の国の裁きとは全く異なるものでしょう。人間の国の法律では、心の中まで裁く事はできません。何を思おうと考えようと自由です。行動が問題です。しかし、天の御神は、行動は勿論、心の中までご覧になり、そして真実に審かれるお方です。そうしますと、この徹底した神の裁きに耐える人、神に「あなたは正しい」として、神の国に入れられる人など殆どいない…というのが私たちの実情ではないのでしょうか。この地上で、神の裁きで無罪判決を受けて、神の国に入れられる人など皆無でしょう。

そうしますと、主イエスは、そのファリサイ派の人々に向かって「**実に神の国はあなた方の間にある**」と仰っている事と違ってきます。ですから、ここで主イエスが仰る「**神の国**」とは、神の裁きによってやってきた神の国、神の支配でない事が明らかとなります。いえ、寧ろ、審く事ではなく、私たち人間の罪を徹底的に赦す事によって、神は、その御心を行われる、神の国を打ち立てられるのです。そのように私たち罪人、神の裁きに滅びるしかない者をも神の国に生きることができるよう、主イエスは今、エルサレムへと上って行かれています。いい方を変えれば、私達は自分の力では、まっすぐに縦軸、神との関係を据える事ができないのだと思います。それで天の御神が、ご自身と私達の関係、縦軸を私達の内にしっかりと据えてくださいました、打ち立ててくださいました。イエス・キリスト、このお方を私達の内に縦軸として貫き立ててくださっていると言えるのだと思います。

いつも私事で恐縮ですが、私は四十歳で初めて教会に行きました。それまでは、自分の人生は自分の力で切り開くもの、神や仏の力に頼るのは弱い者でありダメな事だと信じて生きていました。「人はこうあらねばならぬ、あああらねばならぬ」と考えて生きていました。神は信じていませんでしたが、どこかファリサイ派の人々に近い生き方です。しかし、安心して生きていく事ができませんでした。本当に小さいもの、あやふやなものを縦軸に生きていたので、いつも周りの状況に左右されます。周りにしっかりと支えられてうまくいけば、自分の力だと勘違いして傲慢になり、なかなかうまくいかない事が出てくれば、自分はダメな人間、生きている価値がないとまで卑屈になる…傲慢と卑屈の間を揺れ動きながら生きていました。「自分は何もできなくて生きていい存在」とはとても思えなかったのです。ですが、そんな混乱した私をイエス・キリストは深く愛して、私の名を呼んでくださいました。「私の十字架はあなたの為だよ」と神さまとの信頼関係に生きる事ができる

ようにしてくださいました。神の国に生きることができるようになってくださった。神さまとの信頼関係を与えられる、まっすぐな縦軸を据えられるとは、キリスト・イエスによって私たちが知る事ができるようになった神の愛、この神の愛によって生かされるということ、キリスト・イエスの名によって神に祈りを捧げ、感謝と賛美をもって生きること、それが神の国に生きる事だと思います。そういうキリストの愛に人生を変えられた人たち、神の国に生かされている人たちが集まってできたのが、教会です。

主はおっしゃいます。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。」。ここでの「見える」という単語は、「観察できる」と訳すことができます。「愛」とは観察して知る事ができるものでしょうか。愛され、愛してこそ、知る事ができるのではないのでしょうか。ですから、神の国というのは、言葉を変えれば、神に愛されてある事を確信し、また人間の方でも神を愛する、そのような関係に生きる者達の国というのでありましょう。イエス・キリストを通じて神との愛なる関係に飛び込まなければ、神の国は分からないのです。

主イエスがご自身と対立するファリサイ派の人々に、「**実に神の国は、あなたがたの間にある**」と仰った言葉の奥には、「私がこの地上に来たことで神の愛を宣べ伝えているのだから、あなたがたもまた神様との愛の関係に飛び込みなさい。」と招いておられるのだと思います。

◇神の支配は揺るぎないもの

しかし、御子イエス・キリストによって神の国がこの地上に訪れたのであるなら、どうして世界はよくなるのだろうか…と思う方もいらっしゃるでしょう。それは当然だと思います。世界を眺めてみると、悲惨な現実がそこかしこにあります。ですが、神がこの世界をご覧になる見方と私たちが見る見方は随分と違います。先ほど読み交わした詩篇37篇にもありましたが、悪いことをする者が栄えていても、長い目でみれば一時的な事だと言えます。必ず神によって滅ぼされます。歴史を眺めてみても、人々を虐げる独裁者や権力者の栄華は儚いものです。そうすると次のように問われる方もいるかもしれません。「しかし、人間の悪は、あぶくのように、次から次へと消えては、また現れ決してなくなるじゃないか」。そうです、確かに、消えてはなくなる泡のように悪はこの世界に生まれて、悲しみを振りまいています。私たち人間の国、人間の世界は、神に逆らう罪に支配されているので、そのような悪が生きる余地が沢山あるのです。

しかし、イエス・キリストがおいでになり、私たち人間を罪の支配から解放し、神さまとの真実の関係に生きる事ができるようになってくださった、神の支配に生きる事ができるようにされた、そのような神の救いがもたらされたのは揺るぎない現実です。それは私達の力によるものではありません。全て神が

なされたこと。そして、私達人間の力でもたらした神の国ではない以上、私達のあり方、この世界のあり方によらない神の支配です。どんなに私達の世界で悪が栄えているように見えても、神がこの世界をしっかりと支配していらっしゃるということについては、私たちは疑う必要がなくなりました。いい方を変えれば、主イエスの十字架と復活により、私達を根本的に支配していた罪、私達が神との関係を結ばなくしていた罪が滅ぼされたからです。罪は、その根っこを失いました。今ある世界の罪、私たちの目には大きく強い力だと思える罪は、実は根っこのないものとなっています。

私は、ミョウガが大好きなのですが、これを聞いたある方がお宅の庭に群生しているミョウガを数株分けてくださいました。その株の根はとても水水しく、大きなミョウガの実も根から出ていました。食いしん坊の私は、ミョウガの実だけでなくその根の大部分もごっそり切り取って、刻んで美味しく食べてしまいました。植える段になって、根が殆どない事に後悔したのですが、ミョウガは繁殖力が強いと聞いていたので、なんとかかなと思いきりの部分を庭に植えました。今年の八月はカンカン照りで雨が少なかったせいもあるでしょうが、やはりダメで枯れてしまいました。どんなに繁殖力が強くても根がないと枯れてしまうのだと思い知りました。

私達や私達の世界を支配しているように見える死と罪も、主イエスの十字架によってその根が断ち切られました。イエスさまが十字架で苦しみぬいて亡くなった時、神に反する勢力、悪魔は勝利を確信し、喝采を叫んだでしょう。神の御子が人間によって十字架につけられて滅んでいった、これから人間は完全に神を見失い、自分たちを神として生きて、そして自滅していくだろう！神の国は滅んだ！と大喜びしたのだと思います。ところがところが、主イエスは三日目に永遠の命へと甦られます。そうして、死と罪に打ち勝たれたと高らかに宣言されたのです。主の甦りの力により、罪も死も根本的な力を失いました。根無し草となって、私達を支配する力をなくしたと聖書は語り、教会は信じています。

私達はこの地上に生きています、悪魔の誘いに負けて、罪を犯してしまう事もあるでしょう。しかし、主によって自分の罪を示されたのなら、キリストの十字架の前で、自分の罪を悔い改め、「神よ、私を憐れんでください」と赦しを希うとき、神が真実に自分を愛し、赦してくださると知ります。神の愛が自分自身を縛っている罪の縄目を断ち切ってください、新たにつくりかえてキリストの者にされていく事を実感するのです。私達を縛る罪は、根をなくしている儚い力となったと分かります。それは私たちがどうこういうのではなくて、すべて神がキリストを通じてなされたことです。だから、罪が滅ぼされて神の国がこの地上に現れた、これ以上に確かなことはないのです。

◇尚も私達が苦しむのは何故か？

しかし、次のように叫ぶ方々もおられる事と思います。「神の国がそのように今この地上にあるのなら、私が尚もこんなに苦しいのは何故でしょうか？」と。そうです、その通り。神の国に生きる者、キリストの愛に生かされるというのは、決して楽しい事だけではありません、本当に苦しむことになります。私もキリスト者となってから、それまでとは全く別の意味で苦しむようになりました。

しかし、私は最近つくづく、神の御心の為に苦しむ事、悩む事は決して悪いことではないのだと思うのです。考えてみれば、私達が自然に持つ想いと神の御旨とは、全く違うのです。特に人を愛すること、赦す事において、全く異なります。ある青年と主イエス・キリストの十字架の事で話をしたことがあります。私は、主イエスが自分を十字架に釘づける者達の為の執り成しの祈り「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのかわからないのです。」の話をしました。青年が、この祈りに現れたキリストの愛に心打たれるに違いないと思い前のめりに語りました。ですが、「この祈りについてどう思う？」と聞く私に彼は次のように答えました。「頭がおかしいんじゃないかと思います。」あまりに意外な答えを聞いた時は、びっくりしました。ですが、考え直してみると、彼は実に正直であり真実を言っているのだと気がつきました。神の赦しとは、まことに私達人間からすれば「頭おかしい」ほどのことなのです。人間の常識ではとても考えられないほどのとんでもない赦し、途方もない愛、人間の狭い器では収まりきれないもの、まさに「頭おかしい」としか言えない、考えられないほどの徹底した愛、受け入れないほどの赦し。私たち人間の内には決してない愛であり、赦しです。そうでなければ、全ての人の罪を赦し洗い流し、神の国をもたらす事などできません。この桁外れの赦しと愛、私たちの内にはない赦しと愛によって神の国はあるのです。その神の国に生きるということは、人を愛し赦そうとすること。そうであれば、私たちが苦しみ葛藤するのは、ごく当然のことです。何も訝しむ事も怪しむ事ありません。神の国に生き、愛せない人を愛する事に苦しむのも、許せない人を赦すことに呻くのも、決して悪いことではなく善い事、私たちが神の国に生きている証なのです。

神の国に生きる為の苦しみや悩みであるならば、決して無駄に終わる事はありません、絶望に終わる事はありません。許せない私たち、愛せない私たちを神の言葉が打ち砕き、苦しみ悩み悲しんで、力尽き、神の御前に額づく時、私達には、十字架と復活の主イエスの愛と力が注がれます。そして、新しくつくりかえられていきます。神の国を生きる者とされるのです。何故なら、主イエスは十字架上で罪を贖って亡くなられた三日後に、永遠の命へと甦られたからです。この永遠の命の力が私達に働く、それが神の国だからです。ですから自分に絶望しても、神に絶望する事はありません。私達は確かに苦しむでしょう、しかし、主イエスと共に苦しみ死ぬ者は、主イエスと共に甦ります。そうして、この地上の神の国を生きる者とされます。やがての

時、この地上の命を終える時、主は、「我が愛する者よ」と声を懸けて、神のみ側へと召してくださいます。それは既に約束されていること。神の約束ですから、決して違えられる事はありません。だから、大丈夫、私たちはこの地上の神の国で安心して苦しむ事ができます。安心して嘆き祈る事ができるのです。

◇終わり

私達は、過ぎた七日間キリスト・イエスに生かされ、そして今日、主イエスの甦りの朝に、主イエスの十字架のもとに戻ってきました。神に赦され救われた者として感謝と賛美を捧げています。そこに主の言葉が響きます。「実に神の国は、この横浜ナザレン教会のあなた方の間にある」と。この主の言葉に押し出され、七日の旅路を送る一人一人に神の国が現れますように、切に祈ります。